

広報第2巻の自己評価

教育学部 小 嶋 秀 夫

昨年5月、はじめての広報委員として、尾田（工）、須原（理）、辻（薬）、小嶋が選ばれこの広報も第2代目に入ることになった。内情をいうと、運営委員会で広報委員長を互選したとき、ある大先生と私とが同票となった。このような場合には年長者を当選とすべきだという私の主張は容れられず、再度投票した結果、私が委員長をつとめることになってしまった。今年度は辻先生が委員長になられ、どうやら若いものが広報を担当するという傾向が出てきたようで、これを巻き返すのは、すこし骨が折れそうだ。それはそうとして、第2巻は、私たち4名とセンター（当時）の田辺さんとのチーム・ワークで出来たものである。担当委員4名は、それぞれ計算機利用については相当の経験を積み、また、編集の仕事に関しても、全くの無経験ということはなかったのであるが、やり出してみるとミスが続出し、多くの方にご迷惑をおかけし、見苦しい体を示したことを心から申し訳なく思っている。これは私の注意不十分のせいだ。実は、私たち委員は、第2巻の1号を恐る恐る出したのである。それまでに、「広報に無駄な金をかけることは止めよ」とか、「とう写版刷りの速報で十分だ」という意見や、「もっと充実した中味のものをごんごん出せ」という声が私たちの耳に入っていたからである。1号に対して、「こんなくだらんものに金をかけて」とか、「もっと中味の充実したものなら、ごんごん出せと言ったのだ」というお叱りを受けることを覚悟しながらも、読者から有益な示唆が得られるだろうと、私たちは大いに期待していたのである。

ところが、1号に対する反応は、きわめて呆気なかった。これは、2号の編集後記にもあるように、あまりにも叱るところが多すぎた結果か、あるいは、大のおとなが赤子に対して手を振り上げることをおとな気ないと感じられたからなのか知らないが、私たちが拍子ぬけしたのは事実であった。いや、それよりも残念だったのは、せっかく苦勞して解説や研究の原稿を書いてくださった方に対しても、積極的な反応が少なかったことである。読者に対するアンケート調査の話が出たのも、この頃だったかも知れない。

たしかに、この種の広報の編集に携わるものは、(1)広報はどの程度読まれているのか、(2)読者が有用と感じたり興味をもった記事はなにか、また、どのような企画を望んでいるのか、(3)読者は広報の発行回数やページ数を適当と考えているのかなどの点に関心をもつ。このような情報により、自分たちの仕事のもつ意味を確認すると同時に、必要に応じて広報編集活動を調節するというフィード・バックによる制御を行なおうとするからである。たとえば、京大センターの広報（1972. 5. No. 1）は、前年の秋の広報を通して行なったアンケート調査結果（回答者 873名、約41%）を報告している。それによると、回答者の約97%は、少なくとも、ときどき広報を読んでいることになっている。よりかんたんな方式で調べた東大のセンター・ニュース（1970. 2. No. 9）でも、この比率はあまり変わらない。無記入者や回答をよせなかった人（この中には、計算機のユーザーでない人が、かなり含まれていると思われる）が、仮に広報を全然読んでいないとしても、京大の広報の場合で全体の約4割の人が、なんらかの形で広報を読んでいることが確実だとすれば、執筆者や編集者にとって心強いことであろう。

さて、金大の広報の状況はどうであろうか。調査資料は全然ないのであるが、椅子に坐って、かつての首相のように上からではなくユーザーのレベルに立って、声なき声をおしはかり、さらに、私たちが担当した第2巻を、自分たちがめざしていた目標と照らしあわせて、個人的に自己評価をしてみようと思う。

最後の号であった第2巻3号のうち、約160部が個々の計算機利用者へ、約200部が部長や各講座・学科・教室の主任あてに配布され、20部たらずが学外へ送られたという。実はこのうち、2番目の200部が問題で、事務部門ではどうなっているか知らないが、教室においては

主任のもとでストップして回覧されないことが多いようである。私たちは、計算機を現在利用しておられない人も、大切な読者だと考えて来たので、この現状は困ったことだと考えている。ここに書いても無駄かも知れないが、なんとかファイルして、教室の図書室なり共同研究室にでも置くようにしていただけないものかと思う。ノン・ユーザーが大切な読者であるなら、ユーザーは、まさに神様で、神様ひとりひとりに広報が渡らないのは何事かという訳で、第2巻から漸く、希望されるユーザーには、広報が届けられることになったのである。

ところでいま仮に、この広報についてのやや詳しい質問紙調査を、その配布を受けている人を対象に行なったとする。調査用紙が適切に設計されていれば、ユーザーの大部分が同業または同好のよしみで回答を寄せられるだろうから、回答の回収率は4割前後となる。そしてもし回答者の大部分がユーザーであるとすれば、回答者の9割をこえる人が、少なくとも「ときどき広報を読む」という反応をされるのではないか。これらは、偶然かも知れないが、大型センターでの結果に近い。また、いま、広報の発行回数は年何回くらいが適当かと問えば、3～4回という人が多くなり、ページ数に関しても第2巻の3つの号の平均に近い30ページ内外が適当という反応が多いのではないか。しかし、もし、もっと充実した40ページくらいの広報を月刊で出しても、京大の調査結果にあるような「現状の形態がもっとも支持されている。」ということになるに違いない。この種の質問をすると、現状によほど問題がない限り、現状肯定の結果が出やすくなるものなのである。回答者の判断の係留点として現状が選ばれ易く、また、編集者側も自分たちに許された発行回数やページ数にあわせて、それに適切な編集をするようになることが多いのではないか。その結果、「これはこんなものだ。」という意味での現状肯定の反応が多く出るのでと考えられる。このように考えてくると、仮定の質問紙調査で、回答者の9割もの人になんらかの形で広報を読み、その量についても異をとねえる人が少ないとしても、私たちは満足しているわけには行かない。やはり問題は広報が実際に果たしている機能である。

いま、この広報の発行を完全にとり止めたら、どうなるであろうか。センターが困るという理由は、いくつか想像できる。しかし、その理由も消極的なものが多く、本質的なものではないように思える。さて、ユーザーの反応はどうであろうか。「それは困る。せっかく自分も協力してここまで育ててきたのだから。」と言ってくださり、そんな方の何人かの名前が頭に浮かぶ。しかし、「予算の都合や原稿が集まらないので、これで発行を中止します。」と言えば、「そうか。じゃ速報はちゃんと頼むよ。」という方が、もっと多いのではないかと思う。私が当初に編集活動の目標としたのは、センター、利用者、非利用者間のコミュニケーションをはかり、センターの運営を円滑にし、研究の条件を少しでもよくすることであった。このうち、センターと利用者間のコミュニケーションについては、いくらかの改善がこの一年のうちに見られたとすれば、広報もその一端の役割を果たしたと思う。つぎに、利用者相互間のコミュニケーションの促進についていうと、あまり進展はなく、一部の熱心な寄稿者の努力も、いまのところ一方交通のままのようである。この大学の研究者層の薄さとも関係するのか、計算機利用法の発展に関する利用者からの盛り上がりは少なく、また広報も、それを盛り上げるように働けなかった。共同利用設備の利用者は、たんなる顧客ではないのだと思う。利用者が積極的にセンターの運営や、研究者相互の情報交換に参加できるようなシステムを育てるために、広報はより能動的に動くべきだったと反省している。

考えてみると、第2巻は1つの過渡期を示している。それ以前の3冊は、センター設立直後のため、運用上の情報をセンターから流すという色彩が強かった。第3巻からは、辻委員長のもとで、研究をより前面に打ち出した編集がなされると聞いている。私たちが担当した第2巻の3冊は、ちょうどその移り変わりの時期のものだったと思う。言い訳がましい自己評価になってしまった。最後に、第2巻の熱心な寄稿者の方々、ともに仕事を楽しく飲んだ委員の方方、田辺さんやセンターの皆さん、そして最後になりましたがセンター長の平井先生にあつく御礼申しあげます。

(前 広報委員長)